DumbType「Voyage」雑感

角田達朗

Thoughts on DumbType "Voyage"

Tatsuo Sumida

1

DumbTypeの新作「Voyage」の公演が彩の国さいたま芸術劇場大ホールで8月30日～9月1日に，シアター・ドラマシティで9月6・7日に行われた。私は9月7日のマチネを観るべく大阪まで出掛けた。

DumbTypeは1984年に京都市立芸術大学の学生を中心に結成。映像，美術，音楽，デザイン，建築，ダンスなど多様な領域にわたるメンバーたちが，プロジェクトごとに集合し，パフォーマンス，インスタレーション，音楽，印刷物等を共同制作していくという，ゆるやかというか可変的な構成を取る集団で，テクノロジーと人間の関わりという視点が活動に通底しているとされる。多ジャンルの融合という点では，昨今ブームになっているらしい「コラボレーション・アート」の先駆者とも言える。日本国内はもとより世界各地の美術館，アートセンターでも上演等の活動を行っている。ちなみに，彼らは自分たちの上演を「パフォーマンス」と呼んでおり，演劇めいた要素もないわけではないが，やはり演劇とは一線を画す総合的上演表現と言うべきものだろう。

私には今回の「Voyage」が初見となる。かねがね観たいと思いつつ，東海地区での上演がなかったこともあって，これまで鑑賞の機会を得られなかった。

私が以前からこの集団の「パフォーマンス」を観たいと思っていたのは，単に彼らが高名であるという理由だけではない。率直に言って，私は「演劇臭い演劇」が好きではない。わかりやすい物語を熱く演じ，目の前にいる観客に露骨に共感されたがるような，幼稚な意識による上演。青臭い感動の押し売り。あるいは，わかりやすい物語をわかりやすく演じることが目の前にいる観客に共感されること，ひいては人気と収入を維持する結果につながることを熟知した文字通り「プロフェッショナル」な上演。私はそうした熱い上演にも生暖かい上演にも違和感を禁じ得ない。

それでは，私がこうした「オーソドックスな」演劇に対して抱く違和感の根源は何か。それは要するに，わかりやすい物語がわかりやすい意味を伝える，という点にある。それだか

ら，その上演は多くの観客に支持される。観客に安心を与えるからだ。それは例えば，観光客が観光地を訪れ，前以て絵葉書やガイドブックで見ていた通りの風景を楽しむのと似ている。それは結局，物事は自分が知っている通りに存在するということの確認であり，そこから得られるのは現状肯定による安心感に過ぎない。

私は自分も従事している演劇というものが，主としてこのような定番の観光地のような機能を果たすことで人々に受容されているという認識を持っている。そして，この認識は私を陰鬱な気分にするのが常である。その結果，私の関心はしだいに演劇を離れ，演劇に隣接する領域に向かうようになった。

熱くも生暖かくもない，つまりはクールな上演ということで言えば，演劇よりもダンスである。ストーリーの叙述が軸となって上演が組み立てられる演劇とは異なり，ダンスは所作の連続そのものが上演を形作る。演劇の場合，俳優の演技も様々な舞台効果もすべてストーリーに従属する。ダンサーの身体表現は多くの場合，振付に従ってはいるものの，演劇に比べれば，はるかに自立的に見える。また，ダンスの方が身体に対する意識が徹底している。徹底しているということは中途半端でないということであり，先程からの比喩的表現を適用すれば，ぬるくないということである。ぬるいものは当然ながらクールではない。だから，演劇の身体表現は概してクールではない。

とは言え，ダンスなら何でも良いというわけではない。ストーリーやテーマのあるものは中途半端で気持ち悪い。テクニックを誇示するものは気障である。ダンスの中でも特にクールなものと言えば，やはりコンテンポラリー・ダンスと総称される一群である。コンテンポラリー・ダンスはジャンルと言うべきか否か，微妙なものがある。具体的な表現技法等によって特徴づけられないからだ。むしろ，表現技法への固執を捨てたものこそがコンテンポラリーなのだと言っても良さそうだ。表現技法への固執を捨てた時にあらわになるのは，具体的なダンスを生み出す思考であり，意識の純度だと言っても良い。具体的な何事かを指し示さないダンスによって，作り手の意識そのものが提示されるわけである。

そこには，演劇がストーリーの叙述によって表現するのとは別種の「意味」が存在する。そして，その「意味」は，ストーリーの叙述といった何事かに従属するのでないがゆえに，クールであると感じられる。要するに私は，上演を構成する諸要素や上演によって提示される内容が，何事かに一元的に支配されるような閉鎖的求心的構造の表現を息苦しいと感じ，それとは異なった表現，より開放的で多元的な表現を求めているわけである。

私がDumbTypeの公演に期待するものも，そうした表現，もしくはそれへの示唆である。複数のジャンルをまたぎ，これを総合化するという所に，多元的でゆるやかな表現の成立を期待しているのだ。もちろん私自身も今後の演劇活動の中で，そうした表現を模索していきたいと考えている。いや，何も演劇のみに限定することではない。まずこの拙稿を，閉鎖的求心的構造にならないように心掛けて書いてみることにしよう。

2

公演会場のシアター・ドラマシティーには，ＪＲ大阪駅から徒歩８分。阪急梅田駅からなら徒歩３分だが，名古屋からだと阪急は使えない。いささか語弊の伴う表現かもしれないが「劇場を造るのがもったいないくらい」の一等地である。こんな一等地に劇場を造るというのが，どうも私には腑に落ちない。これだけの繁華街には娯楽はふさわしかろうが，芸術はなじまないように思われる。別にアングラ趣味ということはないつもりだし，芸術対娯楽なんていう二元論で物を考えようとも思わないが。

シアター・ドラマシティーは「ちゃやまちアプローズビル」という意味のよくわからない名前のビルの地下一階に位置する。ちなみに，一階は梅田コマ劇場，それより上のフロアはホテル阪急インターナショナルである。

ロビーに入ると，パンフレットや過去の上演等のビデオの販売に並んで，オペラグラスの貸出をしている。貸料は300円だが，一時預かりの保証金として7000円が必要とのこと。保証金はオペラグラスの返却時に返って来るとはいうものの，パンフレットやビデオを買ったら7000円も払える余裕はない。いくらなんでも高過ぎないか。

そもそもオペラグラスが必要なほどダダッ広い劇場なのだろうか。イヤな予感がする。私の席は確か最後列だったはず。それに，連れ合いと二人で観に来たのだが，過日チケットを買った時点でバラバラに１席ずつしか残っていなかった。別に離れ離れになるのは構わないが，並んで座っていれば，一つのオペラグラスを交代で使えるのに，席が離れてたら，それもままならない。

結局何も買わず，何も借りず，ホールに入る。デカい，デカ過ぎる。四季のミュージカルではあるまいし，前衛的パフォーマンスを観るような規模とはといてい思われない。舞台がかすんでいる。最前列の観客なんてただのまだら模様だ。急いでロビーに引き返してオペラグラスを借りる。連れ合いの分も借りるとなると一時的とは言え，14600円必要だ。どうしようかと思案するが，肝心の本人の姿が見当たらない。喉が渇いたので，ジュースを買う。普通サイズの紙コップで150円。「ぼったくり」だ。やはり商業演劇の劇場だったのだ。梅田コマの下にあるだけのことはある。商業演劇って，利潤第一主義が露骨に見えるから，イヤなのだ。

そんなことを思いつつ席に戻る。至る所，空席あり。それもカタマリで。一列まるごととか，ワン・ブロックまるごととか，信じられないような空き方だ。どうして私たち夫婦は離れ離れに座らされているのだ。どうせ，主催だか共催だか提携だかしてる企業等がごっそりチケットを召し上げて，ドブ同然の所にむやみに配りまくったに決まっている。腹立たしい。

気を取り直して，オペラグラスで舞台の方を視る。黒い幕が下りているので焦点を合わせられない。代わりに舞台すぐ横のデジタル時計に合わせようとしたら，途端に表示が消えた。まもなく開演だ。とりあえず最前列の客席で焦点を合わせようとすると，ん？フォーカスの

つまみをいくら回しても全然アップにならない…。

何のことはない，私の持ち方があべこべで，外に向ける方のレンズからのぞき込んでいたのだった。ベタなボケかましてもうた。ま，大阪来たからには，こないなこともやっとかんとね。誰も突っ込んでくれへんのが淋しいけどな。

インチキな関西弁で失礼しました。

3

いよいよ開演。いくつかの光景が連続して提示される。ストーリーらしきものはない。映像が舞台後方の巨大なスクリーンに鮮明に投映される。どうしたらあんなに大きく投映できるのだろう。前方から投映すれば，出演者にも当たってしまいそうだが，そうはならず，かと言って，後方からにしてはスクリーンの後ろにそれほど奥行きがありそうには見えない。

最初の光景。最後列から肉眼では，かなり見えづらい。オペラグラスごしに一人の女性がゆっくりとしたダンスを踊っているのを見る。映像は抽象的な球体。ちょっとしたアクセントという感じ。ダンス自体に特に興味は持てない。

次の光景。暗転中の暗闇からジャラジャラという音が聞こえてくる。明るくなると，複数の男性がグラウンドを均すのに使うような道具で石をかいているのが見える。二人の女性が人の名を呼びながら，互いに絡み合うように動く。たぶん互いの名を呼んでいるのだろう。この上演の中ではこれが一番演技っぽく，そして，観ていて最も気恥ずかしくなる部分だった。

この二人の女性は名を呼ぶ人を演じている。ごく単純な行為ではあるが，演技の要素があり，何事かの〈ふり＝真似〉であり，真似である以上は〈似せ物＝偽物〉である。ダンスその他の身体表現は何かを真似るのでなく，〈似せ物〉ではない。それ自体が本物だ。本物の身体表現に取り囲まれると，演技という〈似せ物〉は何ともそらぞらしく貧弱に見える。しかも，中途半端に演技っぽい表現は何かの隠喩に見えるがゆえに，いっそう不細工に感じられた。

ただし，この場面はまた，今回の上演の中で最も面白くもあった。二人の女性が演技っぽいことをしている後ろで，男たちはずっと石をかき続ける。だから，二人の女性が名を呼び合っている最中も，ジャラジャラという音が聞こえてくる。そんなふうにして異物がずっと共存している様子は奇妙に印象的だ。

純粋に一つの光景として美しかったのは，中央に一人の女性が横たわり，背景に青を基調とする様々な映像（雪山の頂や，英文を重ねた景色や，光の帯が高速で流れて行くのや）が投映される場面。床にも光沢のある板が敷かれていて，それがちょうど静かな湖面のようにスクリーンの映像を映し出す。それはこの場面に限ったことではないが，この場面では特に効果的だった。横たわる女性が風景の中にすっぽり包み込まれているような，不思議な感覚

があった。

4

それにしても，この集団の持ち味は，多ジャンルを総合した多面的コラボレーションにあったのではないのだろうか。今回の上演は場面と場面とが脈絡らしきもので結び合わされておらず，また，どの場面を取っても，身体表現と映像の単純な並列に止まった。そのあまりの単純さがかえって一種の味わいとなっている場面もありはしたが，全体を通して観ると，やはり物足りない感じが強く残る。身体表現する者の背後に映像を投映するだけなら，それは単に目新しい舞台装置として映像を利用したに過ぎない。身体表現と映像とを絡み合わせるようなコラボレーションだって可能なはずなのに。

もし仮に今回のパフォーマンスがそうした融合をことさら回避したのだとすれば，その理由を知りたいとは思う。

例えば，去年９月11日にアメリカで遂行された同時多発テロとそれに続くアメリカの対アフガニスタン戦争は，国際社会なるものが秩序と融合を基調とするものではなく，むしろ断絶と分裂こそ実相であることを改めてまざまざと見せつけた。そして，この公演の直後に同時多発テロ事件はちょうど一周年を迎える。そうした状況認識に立つならば，表現技術によって実現される秩序や融合を盲信できなくなり，あえて秩序や融合を拒否して，要素を並列し対置するだけの表現を選択するということも考えられないことではない。

終演後，パンフレットと過去の公演「ｐＨ」のビデオを買う。帰りのひかりの中でパンフレットをめくると「延々と繰り返される悲しみと憎しみの連鎖。わたしたちをとりまく不透明で不安な状況」という言葉が出て来た。やはり彼らは私たちを取り巻く状況への認識から，並列と対置を基調とする表現，表現そのものへの問いかけと状況への問いかけとが両立するような表現を選び取ったのだろうか。しかしながら，今回の上演から痛々しいほどの断絶，気の遠くなるほど深い分裂を感じ取れたかと言われれば，私はＮＯだ。

その文章の続きに「しかしもし人が本質的に持つ純粋な気持ちで歌ったり踊ったりすることができれば…！」とあった。「…」の次に「！」。これはいったい，どんなふうに音読すれば良いのだろうか。音読しなければ良いのか。しばしの沈黙の後で，何かにハタと気づくのか。

それはともかく，「延々と繰り返される悲しみと憎しみの連鎖」や「わたしたちをとりまく不透明で不安な状況」に対して，「人が本質的に持つ純粋な気持ち」を対置して，それが何になると言うのだろうか。人が「純粋な気持ち」になれれば「悲しみと憎しみの連鎖」が断ち切られ，私たちが「不透明で不安な状況」から解放されるとでも？

それはあまりにも楽天的なヴィジョンと言うほかない。純粋な信仰，純粋な愛国心…！人々の「純粋な気持ち」が過去も現在も「悲しみと憎しみの連鎖」を支える重要な要因の一

つとなっていることは明白である。

そもそも「気持ち」というものに「純粋」という尺度を当てはめることに，どんな意味があるのだろうか。気持ちの純粋さなるものに客観性はない。本人が「自分の気持ちは純粋だ」と思うか否かしかないのだ。独善に陥りやすい道理である。

もっとも，あの上演から「純粋な気持ちで歌ったり踊ったりする」姿を見て取ることができたかと言われれば，やはり私はＮＯだ。もしもあの舞台に立つ人々が「純粋な気持ちで歌ったり踊ったり」したならば，私はそれを見ながらその中に潜在する「悲しみと憎しみの連鎖」に打ちのめされ，そこから不用意に生み出される「不透明で不安な状況」に怯えなければならなかっただろう。そうならなかったことは少なくとも私にとっては幸いだった。そのような体験は，私が常日頃忌み嫌っている「共感の押し付け」と本質的に大差ないものと言うほかないのだから。